ソデイカ生態解明中

低水温域寄り付かず

昼は潜行 夜海面に

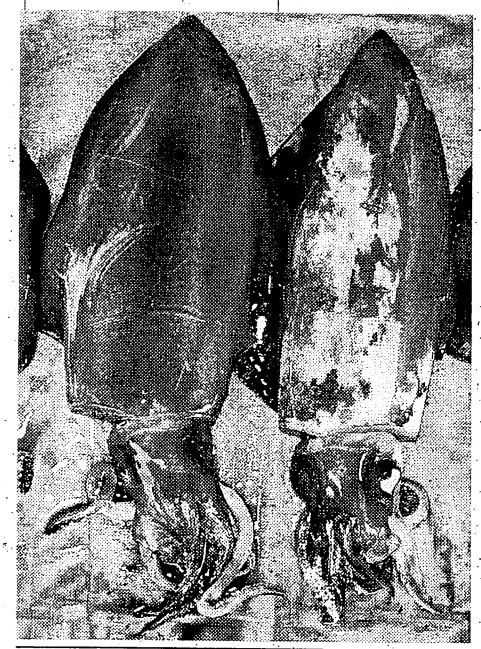
県水産技術センターなど日本海で調査

好漁場を予測へ

20日、香住で成果発表

日本海での主要な漁獲物でありながら生態に謎が多いソデイカ（赤イカ）について、水温が低い海域には寄り付かないことや、昼と夜では泳いでいる水深が異なっていることが、県但馬水産技術センターなどの研究チームによる調査で分かってきた。好漁場を予測するなど、漁業への活用が期待されるという。二十日に、香美町香住区香住の香住漁協でシンポジウムを開き、研究成果を発表する。

（岩崎昂志）



生態についての研究成果が報告されるソデイカ

ソデイカは成長すると胴長八五㌢、体重二〇㌔にもなり、すしねたなどに使われる。寿命はほぼ一年未満で、南方の海から来遊する。県内の水揚げ量は二百一千㌧で、沖縄に次いで全国二位。

同センターは、近畿大学や九州大学などと連携し、二〇〇四年度から研究を開始。イカに標識や発信機を付けて動きを追ったり、八年前から漁師に依頼して記録した漁獲場所などのデータを分析したりして水温との関係を調べるなどしてきた。

その結果、水温が高い沿岸部では全体的に漁獲が多く、沖合では水温が低い海域で減少する傾向がみられた。水深約五十㍍の海域では水温十九度以上で、水深約百㍍の海域では十五度以上で好漁場が作られやすいという。また、昼間は水深六十―八十㍍のやや深層にいるが、夜はほぼ海の表面近くを泳ぎ、月の満ち欠けによる光量の変化も関係があるとの分析もある。

さらに、研究チームでは山陰沖の海流や水温を予測する技術の開発も進めている。今回の研究成果をもとに、数週間から一カ月先、どこに好漁場が形成されるのかを、事前に予測することも可能になるという。

同センター主任研究員の宮原一隆さんは「漁業者の協力あってこその研究成果。漁業に活用してほしい」と話している。

シンポジウムは午後一―四時。参加無料。同センター☎0796・36・0395

2007.2.16

アカイカ

生態、漁場環境探る

20日、香住でシンポジウム

兵庫、鳥取県が研究成果発表

アカイカのレプリカでシンポジウムをＰＲする女性＝香美町香住区境、但馬水産技術センター

山陰の日本海沿岸で九―十一月が盛漁期の大型イカ「アカイカ（ソデイカ）」の生態や効果的な漁の可能性を探るためのシンポジウムが二十日、香美町香住区若松の香住町漁協で開かれる。入場無料。兵庫・鳥取両県が大学や国の研究機関と進めている共同プロジェクトの研究成果が発表される。

同シンポジウムは兵庫県但馬水産技術センターと鳥取県栽培漁業センターの主催で、昨年は鳥取市で開かれた。標識放流や追跡調査から分かったアカイカの生態、効果的に漁ができる漁場環境についてなど研究成果を両県のイカ釣り漁業者らに伝え、漁業への生かし方を提案する機会としている。

当日は研究者六人が研究成果を報告するほか、海洋物理学が専門で水産関係に詳しい千手智晴・九州大助教授が「山陰沿岸の水温・塩分変動」について話題提供する。午後一時から同四時まで。

アカイカは一九六〇年代、但馬の漁業者が「樽（たる）流し立縄漁法」を開発したことで、定置網以外での漁が可能になった。年間漁獲量は九〇年代までゼロ―六百トンとばらつきがあったが、近年千トンを超えるなど急増。しかし、生態に不明な点が多く、漁獲量の安定に不安を抱く漁業者らの声を反映し、二〇〇四年度から両県の共同研究が始まった。

シンポジウムの問い合わせは電話0796(36)0395、但馬水産技術センターへ。

2007.2.16 日本海

アカイカの生態知ろう

20日、香住町漁協でシンポ

水揚げされた10キロ級のアカイカ＝06年12月、豊岡市の津居山港で

日本海で漁獲される「ソデイカ」で、但馬では「アカイカ」とも呼ばれる大型イカの生態を探る「第2回あかいかシンポジウム」が20日午後1時から、香美町の香住町漁協で開かれる。県但馬水産技術センターと鳥取県栽培漁業センターが主催し、新しい研究成果などが紹介される。

アカイカは肉厚でもちもちした食感で人気を集め、高値で取引されることも多い。

群れが沿岸部まで押し寄せてくる時期もあり、「謎多き巨大イカ」ともいわれる。シンポでは、標識放流の追跡調査の結果や、群れが回る漁場環境などについて、生態解明につながる研究成果が発表される。入場無料。問い合わせは県但馬水産技術センター（0796・36・0395）へ。

2007.2.7 朝日